
逃走理由/前編

真木 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃走理由／前編

【Nコード】

N6332N

【作者名】

真木 葵

【あらすじ】

怪盗が、探偵の前から逃げた理由は・・・

黒雲が世界を覆っていた。永遠に降り続きそうな雨霰は、無風の夜空から細い筋となって下りてくる。まるで雨のカーテンの様に、彼の視界を閉ざしていた。

鬱蒼と草木が茂る入り口から、この真夜中に廃ビルへと入ってくる人間が居る筈もない。そっとシルクハットを外し、コンクリート剥き出しの壁に背を預ける。ひんやりと冷たい感覚がやけに気持ちよかった。怪我のせいで体温が高くなっている事に気が付かずに居た。雨曝しになっていると言つのに、どことなく寒さを感じない。

闇夜に映える彼の白き翼は、泥と血で汚れてしまっていた。脇腹を応急処置したところで、こんな所に居れば治る怪我也治らない。しかし、それでも彼は動かなかった。動く事が、出来なかった。

ザツ…ザツ…ザツ…

それが人の足音だと気が付いた頃には、彼の左手の方向から少年が一人こちらへ向かって歩いて来ていた。古びた街灯では顔まで見えなかったが、それが誰か解らない筈はない。

(つたく相変わらず鼻が利く猟犬だぜ)

舌打ちをしながらも、安易に自分の居場所を見つけてしまうその少年に敬意さえ表す。警察はいつも彼のフェイクに見事引っ掛かり、なかなか追って来てはくれないのだから。

それでも、今この場で彼に見つかるワケにはいかなかった。雨に濡れたシルクハットを再び被って怪盗を演じる。地面に手を着き、ふらつきながら立ち上がるつとすが…思ったよりも出血が多かったのか、クラツと眩暈が襲う。

「どうしたキッド、仲間割れでもしたのか」

五メートル程離れた場所で少年は立ち止まった。彼とは正反対の、黒いスーツ姿の高校生。紺の傘を差し、片方の手はポケットに突っ込んだまま。到底、脇腹に銃創を抱えて半分倒れ込んでいる人間相手に声を掛ける姿勢ではない。

まるで、人を見下すような冷徹な光すら感じさせる。

「おいおい、あんな連中と仲間だと思われて居たのかオレは」

「違うと言つなら理由を聞かせろ」

「正義の名探偵が、怪我をしている人間に対して少し冷てーんじゃねーの」

「安心しろ、死にそうになったら救急車を呼んでやる。だが、俺から簡単に逃げられない状態のウチに事情を全て話して貰うぜ」

相変わらずの傍若無人ぶりに、こんな状況だと言うのに笑いすら込み上げてくる。

確かに、這いつくばって身の心配をされても正直困る。

「悪いがそれは出来ない」

「麻酔針を打ち込まれたみたいだな。けど生憎、そんなはず濡れのおメーを担いで帰れる程、俺も親切な人間じゃないんだ」

「おいおい、もう小学生の姿じゃないっつーのにサービスがなつてねえな」

立ち上がるうにも貧血で眩暈がし、起き上がるうにも重たい鎖で体を縛り付けられている様な感覚がする程、冷たい雨に打たれすぎた。

どうやって此处を切り抜けるかな…緊張感の全く無い思考回路で自分自身に問い掛けていた。この男から逃げなければ、地の果てま

で追ってくるだろう。

しかし、新一は腑に落ちない表情で首を左右に振った。

そして、ゆっくりと地面に座り込んでいる怪盗の元へと距離を縮めた。

(参ったなあ)

新一の革靴、ズボンの裾には泥が撥ねていた。几帳面な探偵が、水溜まりも避けずに走り回って自分を探していたのだろうか。想像すると何とも滑稽な絵が浮かぶ。小学生の姿だった頃ならまだしも、シャーロック・ホームズを敬愛する彼にしては、些か似合わない熱血漢さえ感じられた。

怪盗がそんなどうでも良い事を考えて居るとは新一も気付いていない。彼が今本気で捕まえに掛ければ、逃げられる算段はゼロになる。しかし、新一は傘を少しだけ傾けるとそつと膝を折った。中腰になり、紺色の傘を怪盗の頭上に差していた。

「何故、言わない」

「何故って聞かれてもな」

「違う、そうじゃない」

「は？」

思わず新一の顔を思い切り見つめてしまった。噛み合わない会話に驚き、視線を投げる。正義の鉄槌でも下すかの勢いだった探偵は、何とも言い難い瞳で怪盗の本心を探ろうとした。何処か優しげに光る、伶俐な瞳で。

「俺を助けておいて、何故オメーは何も言わないんだ」

きつと、彼が脇腹に怪我さえ負っていないければ、胸倉に掴み掛かっている雰囲気だった。怪盗の真実、目的、そんな物よりもまず先に「どうして自分を助けた事に触れないのか」が解らなかつた。

新一は銃口を向けられていた、いつもの手口で犯行を働く怪盗の現場で、不穏な連中を見つけてしまった。怪盗の目的も何も知らない新一は、当然彼らの目的も知らない。だから首を突っ込んでしまった。

けれど“タイムリミット”で焦っていた連中は、警察の蠢く街中なのも関わらず発砲した。威嚇の為ではなく、確かな殺意を持って。しかしそれを助けたのは他でもない、新一が追って居た標的だった。薄暗いビルとビルの合間、突然銃声と共に現れた白い翼が、眼前で一瞬にして血に染まるその光景。

「……………」

一瞬、僅かな痛みが彼を襲った。蹲る程じゃなかったが、問い質す探偵から目を背けてしまった。傷が痛んだのか、胸の奥が痛んだのか、それは本人にも解らない。

「馬鹿じゃねえの、オメー」

「…何か言つて欲しいなら黙つて見逃して欲しいんだがな」

「そうは行くか、たつぷり礼をさせて貰う」

しまった、と思つた時には遅かつた。

新一はさつと手を伸ばすと、怪盗のトレードマークであるシルクハットを外した。そのままモノクルまで手を伸ばすかと警戒したが、シルクハットを掴んだままじつくりと怪盗の素面を覗き込む。

「十八年前のパリで最初に仕事をしていた頃のキッドとは明らかに別人の筈だ。オメーは変装の達人かも知れないが、明らかに昔のキッドとは手口が違う。差し詰め“Jr”とでも言う所だな」

新一の推理は正しかったが物的証拠は何一つない。しかし、彼の探偵としての直感はず外れた試しがない。更に言うなら、言われた怪盗もボーカーフェイスが崩れかけていたのだから、それが一番の証拠とも言える。

「観念するんだな怪盗キッド、俺は決してお前を逃がさない」

新一の言葉を聞きながら、怪盗は服の下に忍ばせている目眩ましの閃光弾の所在を確認した。雨でぬかるんだ地面に落としても発動はしないが、コンクリートの壁にならぶつけければ発動する。

指紋や証拠は残していない、仮にシルクハットを取られた所で問題は無いようにいつもしている事だった。とにかく、この男から逃げなければいけない。

捕まるわけにはいかないから。

そして、彼を“巻き込むわけ”にはいかないから…。

ふと、上空から壁を伝って大きな雨粒が新一の傘へ落ちてきた。気を反らす程の大きさではなかったが、このタイミングを逃したら後がない。

怪盗は服の下を滑らせて、右手の袖口からフィルムケース大の閃光弾を取り出した。が、新一はそれを見逃さなかった。

「だから、それが癪に障るつつつてんのが解らねーのかバーローツツツ！」

紺色の傘を手放し、まるで怪盗の行動を読んでいたかのように彼の腕を掴みあげた。閃光弾はゆっくりと地面に落ちると水溜まりの中に沈んでいった。

その衝撃に脇腹の傷が激しく疼いた、隠せない痛み思わず片目を瞑る。しかし、新一はそんな彼の腕を決して放さなかった。

「テメーの考えなんざお見通しだ。人を馬鹿にするのも好い加減にしろ。お前が俺から逃げる振りして、俺を“事件”から遠ざけようとしている事くらい、そんなの推理するまでもねえんだよ」

新一が連中の凶弾に狙われたのは、全ての理由は怪盗にあった。警察なら奴等も手出ししないだろうが、目障りな探偵ならば消しに掛かる。しかも、都合が悪い事に新一は“最も怪盗を追い詰める名探偵”だ。

けれどこの事件は怪盗の宿命。他の誰も巻き込むワケにはいかないのだ。

新一の正義感を、快斗は知っていたから。もう随分前から…。

「ハハ…おかしな事を言う探偵だ」

「いいのか？早く手当しないと、本気で死ぬぞ」

「オレは、神出鬼没の怪盗キッドだぜ。この程度の傷で死んでたまるかよ」

精一杯の強がりを持ち前の虚勢を張ってみせる。

既に、逃走する気力はゼロに等しい。

「ああ死なせるワケにはいかなーな。奴等を捕まえる為に、囹になつて貰うぜ」

「…人使いが荒いな、相変わらず…」

血の気の失せた顔で苦笑すると、ズリツと体が傾いた。思わず新一も本気で彼を心配し、倒れる体を受け止めた。ずぶ濡れの服は雨を含んで相当体温を奪っている。意味がないと解っていても、傘を拾って彼と自分の頭上に戻した。

「話して貰うから、覚悟しておけ」

彼の腕を自分の首へかけ、両膝の下へ腕を滑らせる。同じ位の背格好の男を抱え上げると、流石の新一でもぬかるんだ地面に足下を取られそうになった。

けれど、彼は命の恩人だった。世間を騒がす大怪盗は、探偵の自分ですら推測出来ない謎に秘められていた。シルクハットを外した少年は、不思議な事に自分に良く似ている。

彼を死なせるワケにはいかない。

そして、街中で拳銃を発砲した連中：嘗て新一が壊滅させた組織の残党とも思える連中を野放しにしておくわけには行かない。

探偵が本当に追わなければいけないのは怪盗ではない。そんな気がしてならないと思いつつ、新一はその場を後にした。

苦悶に歪む少年の頬を、冷たい雨雫が一つ伝って行く。

(後書き)

最後までお付き合いくださいましてありがとうございます。
お気に召して頂けましたら、是非blogの方も宜しく御願致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6332n/>

逃走理由/前編

2010年10月9日17時07分発行